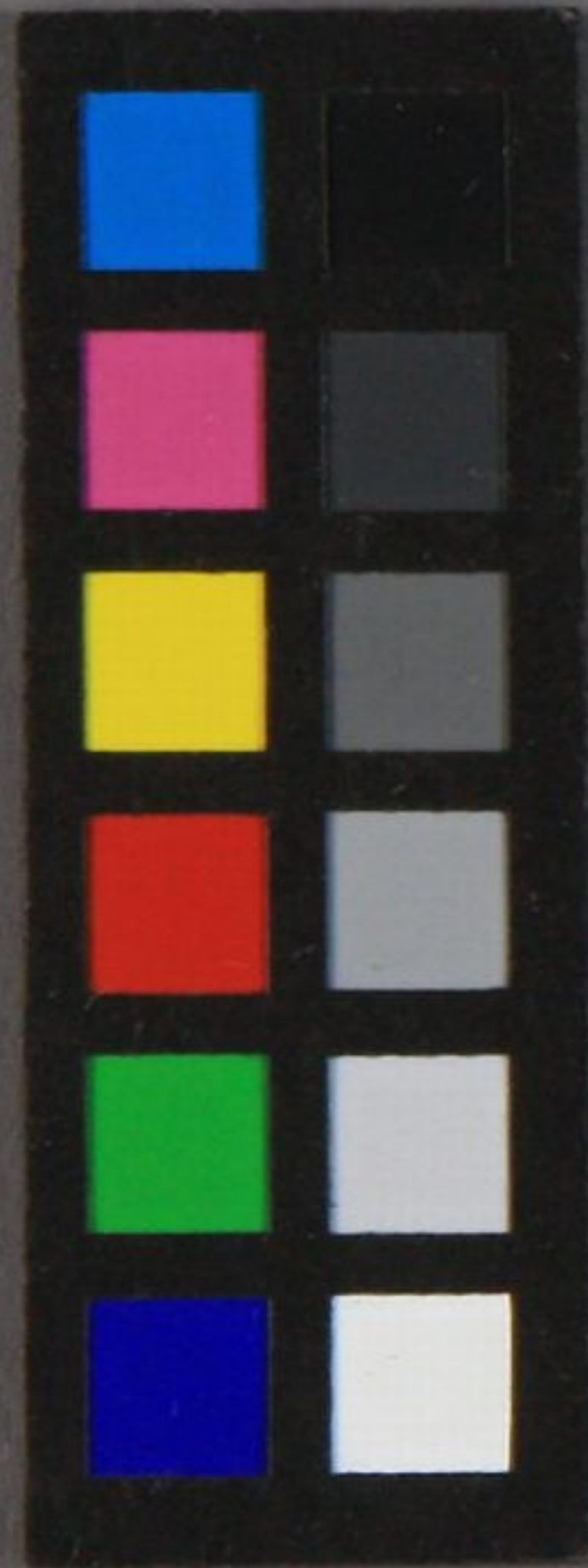


BYRON'S  
PARISINA

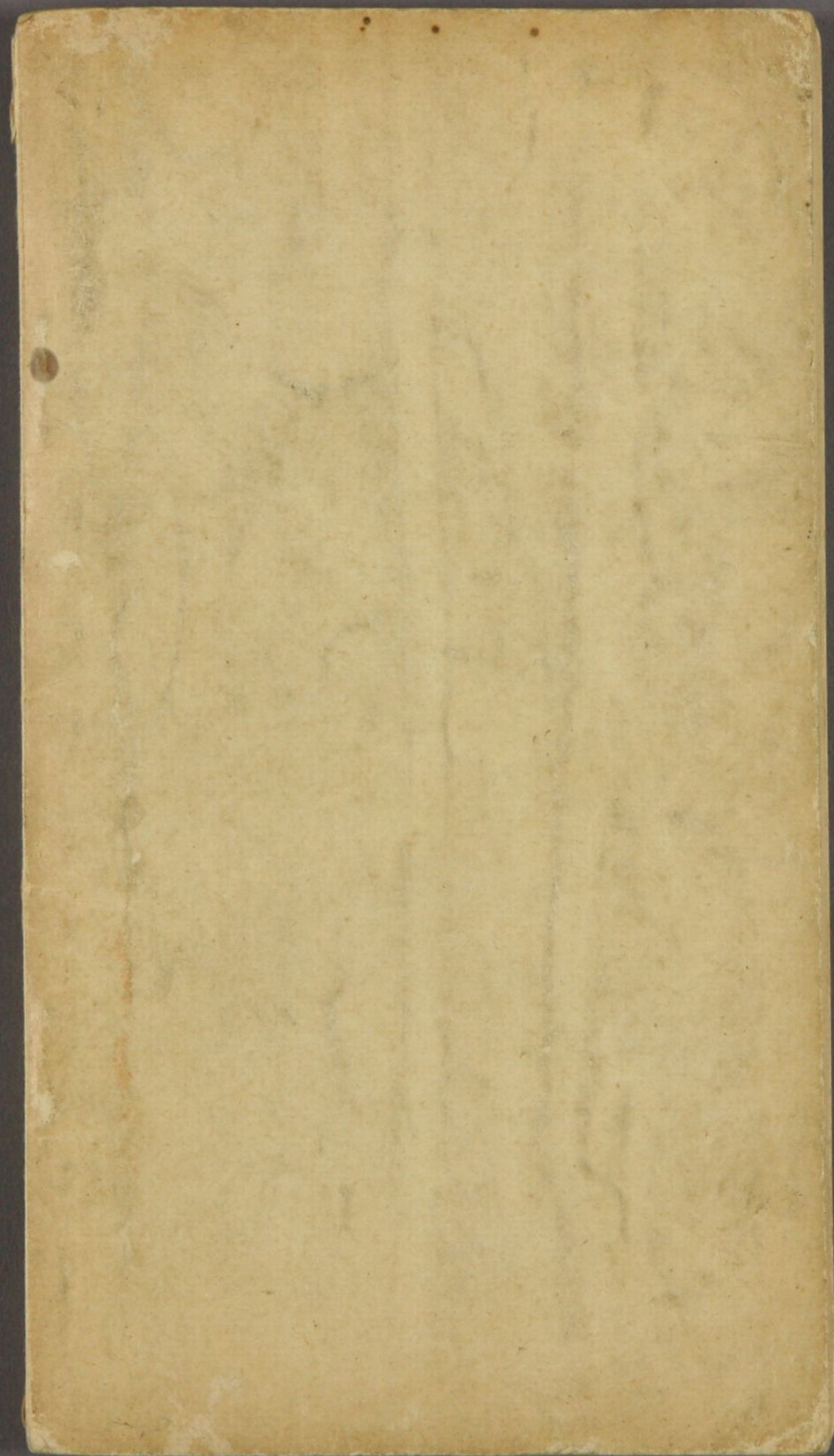


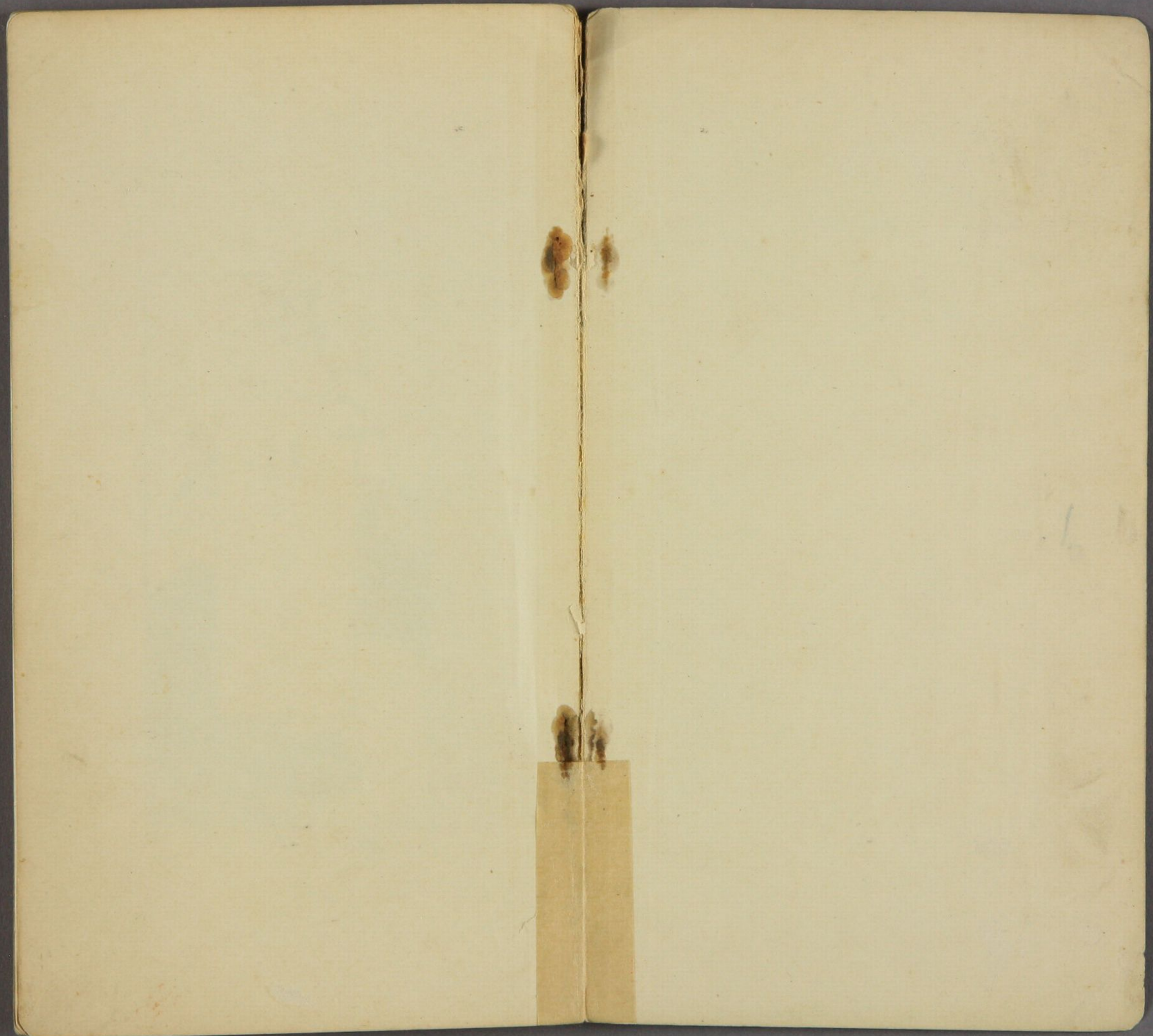
悲劇詩  
艶美

パ  
リ  
シ  
ナ











靴奇郎文庫

第三版



一夏余病を養ひて病床にあり、發熱疼痛已に去れるも、体力未だ回復せず、爲めに尙ほ病床を離るること能はず、無聊の餘り、バイロン中の短詩の翻譯を試みると、横臥のまゝ、枕頭に硯を置き、左手に紙を持ち、右手を空に浮かして書き綴りたるは乃ち本書なり、始め雑誌「白虹」に掲載し、後小冊子となして出版す。(三十六年三月)

バイロンの此詩は其友スクロップ・バードモリア・デ井ース氏に捧呈したるものにして、一千八百十六年一月の出版にかゝる。本篇はバイロン家の財政の最も困難にして、殆ど極度の貧窮に陥れる時に成りしものなり。書肆マーレ、バイロンの窮状を聞知し、金を送りて急を救はんさせしも、バイロン辭して之を受けず、又た原稿料は受取ることを潔とせず、依然書肆に預け置けり。而して

前年中にバイロンの受けたる債務上の執行は、殆ど八九回よりも少なからざりき。

之れに加ふるに會々バイロン夫人、父家に至り、歸り來らずして離婚を請求し來る、あゝ夫人も親戚等も、皆なバイロンの偉大なる人物を見るの明なかりしなり。

「パリシナ」は此くの如きバイロン極度の困難中の作なり。されどもバイロン胸中の餘裕は、こゝに艶美なるパリシナを産出し、勇壯なるヒューゴを活現す。「パリシナ」に對する世間の批評は、其バイロンの人生觀、及び其れより派生する所の倫理觀の非難にあり。夫れ然り。然りと雖、之れ彼れの「觀」にして「主義」には非ざるなり。遮莫、此詩の繪如たる叙景、艶麗にして、而も凄愴なる叙情の美と、玲瓏たる音樂的價値とは、何人と雖否む者あらざるなり。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

本篇に於けるバイロンの例言の大意に曰く此詩はギボンの「ブルンスウィック家の古代」と云へる文中の事實に基きたるものなり。其書に曰く「ニコロ (Niccolo—Este—Azo) 三世 (バイロン之れをア

ゾと改む) の治世には、フェラ、は家庭の紊乱に由つて汚がされたり。エステ侯其侍者の證言及び自己の實檢に由つて、其妻パリシナ (パリシーナ Parisina) と、自己の私生兒たる美にして勇あるヒューゴ (ウーゴ Hugo) との不義の關係を知り、之れを其城内に死刑に所す。父たり夫たる人自ら其耻辱を公表して生存せり……………」と。

されど尙ほフリッチの「フェラ、史 (Frizzi—History of Ferrara) に據りて聊か此事實を委しく記るさんに、一千四百五年、ニココロ侯、ウーゴ (ロエューゴ—Hugo) なる子を有せり、美麗にして且つ伶俐なり。後妻パリシナ・マレテスタを娶る、繼母の常として前妻の子を酷待するより、侯常に之れを憂ふ。時にパリシナ旅行の許可を侯に請ふや、侯之れを許さず。されども其子ウーゴを伴ひ行くべきを命ぜり。之れ旅行中。常に同居するに於ては、或はウーゴを惡むの情を去ることを得んとの意に出づるなり。然り。侯の希望は達せられたり。然りと雖其希望は餘りに達し過ごされ。旅行より歸りて後は、パリシナは常にウーゴを憎まざるのみならずして、却つて反對の極端にまで奔れり。一

日侯の侍者、マリシナの室の前を過ぐるや、マリシナの一侍女泣きつゝ室を出つるに會ひ、問ふに事情を以つてせしかば、其侍女告ぐるにマリシナが些細の事に大に怒りて毆打したることを以つてし、且つマリシナとウーゴとの不義の親密の事情を語れり。此に於て侍者之れを侯に告ぐ。侯容易に信ぜざりしも、遂に侍者の言を聴かざるを得ざるに至り、マリシナの室の天井に穴を穿ちて竊かに之れを窺ひ、以つて其實を確かめ、突然室内に闖入して兩人を捕縛し、其他關係者を拘引し、直ちに審問し、判決して兩人に死刑を宣告せり。されども老家宰等は、涙を以つて彼等兩人の赦免を請ひ、又た其名譽上、かゝる耻辱は之れを隱蔽するの得策なるを諫言せり。されども侯は頑として之れを聽かず、直に死刑執行を命令せり。刑場はジオゴツカ街の頂上なる「獅子」塔の下なる「オーロラ」と稱する室の下に見ゆる所の恐ろしき城なりき。

遂に五月二十一日死刑に處せらるゝこととなり、ウーゴ先づ殺さる。始めにマリシナの不義の事を言ひ傳へたる侍者、マリシナを刑場に導く。マリシナ必ず審中に投ぜらるべしと預想し、刑場に赴

くの途すがら、侍者に問うに其事を以つてす。彼れ告ぐるに斷頭の刑なることを以つてし、又たウーゴは己に處刑されしことを以つてす。此に於てマリシナ悲歎して曰く「然らば妾亦一人生き残ることを願はず」と。刑場に至り、自ら其裝飾を取り去り、面を蔽ひて靜かに刑に就く。

ニツコロ侯其夜は終夜煩悶し、彼方に歩み、此方に歩み、靜居すると能はず、守城の士官に問ふにウーゴの己に死せるかを以てす。士官答ふるに己に死せる由を以つてするや、こゝに彼れ始めて絶望の悲歎に破烈し、叫びて曰く「あゝ吾れ亦其時死せば宜しかりしに。我れは愛兒ウーゴに對して餘りに判決を急ぎたり」と。此くて齒を以つて、己が手にせる杖を噛み砕きつゝ、終夜泣涕慟哭し、數々愛兒ウーゴの名を呼べり、然りと雖翌日に至り、其判決を公示するの必要を想ひ出し、命じて公文を以つて之れをイタリア全國に通告せり。

ニツコロ侯、尙ほ其爲したる所に加ふるに、非常なる復讐心を破裂せしめ、既婚婦人にして、マリシナの如く不貞なりと彼れの認知せる者數人は、マリシナと同じく斷頭の刑に處せられたり。其内



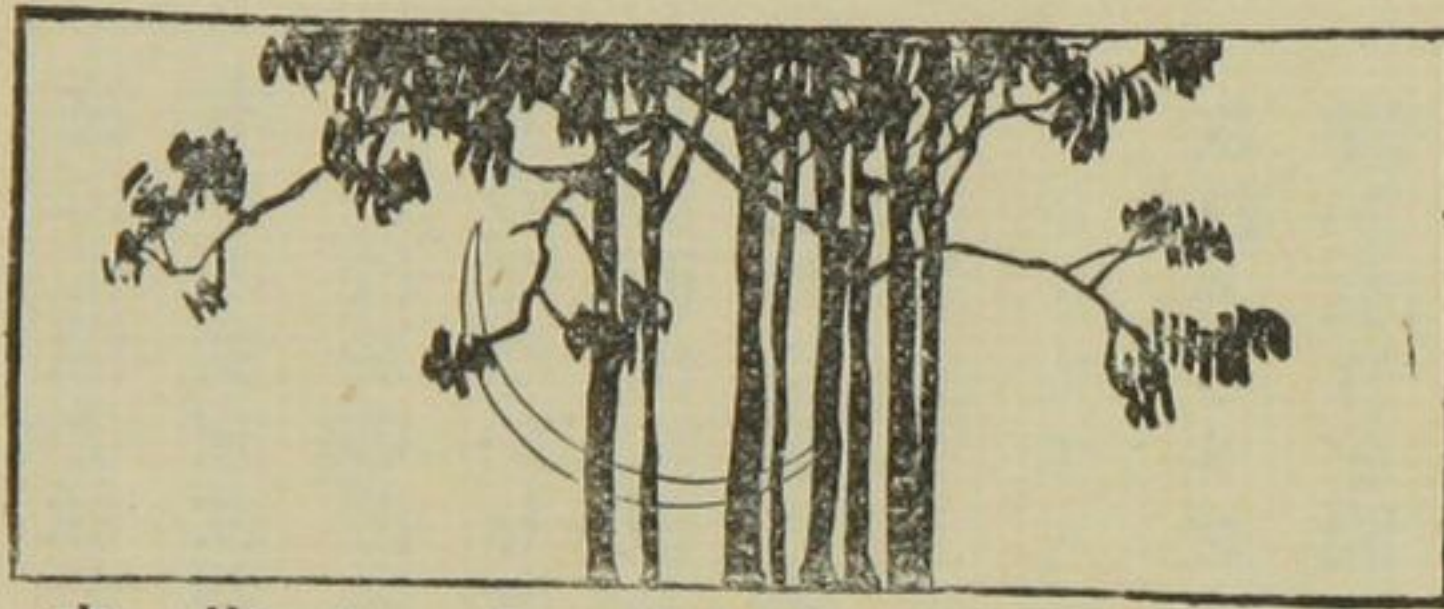
には宮廷裁判官の妻パルメリーナもありき。

之れ此詩の基づく所なり。今左に散文に譯し、成らん限り原詩の辭句を保存することを力めたり。雖、余の文辭に翻はざる到底原詩の美をこゝに移す能はざるは自ら知る、たゞ其大意を知らしむることを得ば余の願足れり。

されども當今の嫉妬深き多くの「文士」輩が、嫉妬黨を組みて、他人の作に惡言し、徒らに鑿穿的批評を事とし、眞面目に文學を助長せんとする盡力を破壊し、以つて日本人の眼界を狹隘にし、以つて徐々に發育せんとせる善良なる萌芽を枯凋せしむる徒輩の、身は怠惰と臆病とに由つて、何等積極的に成すことなきに比する時は、吾人の著譯は如何に完全ならずとするとも、尙ほ文學界に於ては、何等かの功績あるものなることは、吾人の自ら信する所たるなり。

明治廿八年四月三日多少の訂正を加へて第三版を出版せんとする時

木村鷹太郎識す



ナイチンゲールの高き調の囀りは  
今は樹の間にひやく時なり。  
戀人等の交はす言の葉は  
其さゝやきの一語一語に樂しき時なり。  
そよ吹く風、近き水音  
しづけき耳には樂のしらべと聽ゆなり。  
花には露ありて軽くうるほひ、  
空には星はかゝやけり。

I.  
It is the hour when from the boughs  
The nightingale's high note is heard;  
It is the hour when lover's vows  
Seem sweet in every whisper'd word;  
And gentle winds, and waters near,  
Make music to the lonely ear.  
Each flower the dews have lightly wet,  
And in the sky the stars are met,

波には深き緑の色、  
木々の葉末は茶色の光、  
天にはかの澄みたるおぼろ、  
ものなつかしき闇さ、また闇き清さかな。  
日は西山に没して  
餘映月に溶け逝く時。

二

されどパリシナが其室より庭におり立つは  
清き水音を聞かんが爲めには非ざりき。

And on the wave is deeper blue,  
And on the leaf a browner hue,  
And in the heaven that clear-obscure  
So softly dark, and darkly pure,  
Which follows the decline of day,  
As twilight melts beneath the moon away.

II.

But it is not to list to the waterfall  
That Parisina leaves her hall,

(2)

夜の闇くらさに此あでなる貴女の歩むは  
天つみ空の光を見んが爲めにも非ざりき。  
パリシナがエステの園亭に立寄るも  
そは爛熳たる花の爲めにも非ず。  
たとひ耳をそば立つとも、そはナイチンゲールを  
聽かんが爲めにも非らざりき。  
素より耳には他のやさしき言葉を聽かんと心に待  
てりと雖。  
樹立の深き茂みの中より忍びの足音聽えきぬ。  
彼の女の頬は今や色青さめ、胸の動悸は甚だ速く

And it is not to gaze on the heavenly light  
That the lady walks in the shadow of night;  
And if she sits in Este's bower,  
'Tis not for the sake of its full-blown flower—  
She listens—but not for the nightingale—  
Though her ear expects as soft a tale.  
There glides a step through the foliage thick,  
And her cheek grows pale—and her heart beats  
quick;

(3)

凡ての動物も、天も、地も、  
彼等の眼にも心にも、げに何物にてもあらざりき。  
是等は凡て死物の如く、  
四周の事物、身の上、身の下、  
凡てのもの盡く看過されて過ぎ行けり。  
二人の呼吸は二人片身かたみのものにして、  
其のつく息はいとも深き喜に充ち  
其の喜は、よしたとひ、とこしへに移らふことは  
あらずとも、  
彼等二人の幸福なる狂行は

Its living things—its earth and sky—  
Are nothing to their mind and eye.  
And heedless as the dead are they  
Of aught around, above, beneath ;  
As if all else had pass'd away,  
They only for each other breathe ;  
Their very sighs are full of joy  
So deep, that did it not decay,  
That happy madness would destroy

(5)

脈打てり。  
茂みの中より小き聲はさゝやきぬ、  
バリシナは今や顔に紅を回復し、其胸は切迫きつぱくたり。  
今一瞬間—さらば彼等互に相逢はん。  
其瞬間は過ぎ去れり、彼の女の戀人は其足下にあ  
り。

三

彼等にとつては世界万物果して何ぞや。  
時の推移うつり、潮の満干みちひ何かあらん。

There whispers a voice through the rustling  
leaves,  
And her blush returns, and her bosom heaves :  
A moment more—and they shall meet—  
'Tis past—her lover's at her feet.

III.

And what unto them is the world beside,  
With all its change of time and tide ?

(4)

烈火の如き其制御を受くる彼等の胸を壊らん。  
彼等此の穩かならざる優さしき夢の最中もなかに於て  
こは罪なり危険なりと果して思ふことやある。  
此の激烈なる情を感じたる者にして、  
誰か此場に臨みて或は躊躇し或は恐れしものやあ  
る？

或は此る瞬間は永續するものに非ざることを考へ  
しものやある？

されども其瞬間は既に過ぎ去りぬ。

かゝる樂しき夢は、再び來らざることを知る前に、

The hearts which feel its fiery sway.  
Of guilt, of peril, do they deem  
In that tumultuous tender dream?  
Who that have felt that passion's power,  
Or paused or fear'd in such an hour?  
Or thought how brief such moments last?  
But yet—they are already past!  
Alas! we must awake, before

吾等先つ覺めざる可からざるなり。

四

罪ある嬉しかりし場所を

屢々顧みつゝ二人は去りぬ。

又たの逢ふ夜の望みと誓ひはかけて交はせしとは  
いへど、

今の別れは永の別れとなるかの如く二人はいとど

悲しみぬ。

と息つきつゝ抱き合ひ、

We know such vision comes no more.

IV.

With many a lingering look they leave  
The spot of guilty gladness past;  
And though they hope, and vow, they grieve,  
As if that parting were the last.  
The frequent sigh—the long embrace—

口と口とは永久離るゝことを好まざり。  
されどパリシナの面の上には  
罪免さるる恐ろしき天はかゝやきて、  
宛も、静かなる意識ある星は  
遙かより其弱き行を見るが如し。  
尙ほ相逢ひし場所を離れ難み、  
二人はと息つきつゝ抱き合へり。  
されども來べきことは來らざるを得ず。  
罪の行に必ず續ぎ來る所の  
深きふるひすごき戦慄を以つて

二人は恐れよりする重き心に於て別れざるを得ざ  
るなり。

### 五

ヒューゴは己れの床にたゞ一人  
他人の妻を思ひ樂しまんとして行きぬ。  
されどパリシナの物思ふ頭の内には  
又た夫の信せる情をも置かざるを得ざるなり。  
寝りに於て發熱したるなるべく、  
又たなやましき夢の爲めにやパリシナの頬は紅を

Which follows fast the deeds of ill  
V.  
And Hugo is gone to his lonely bed,  
To covet there another's bride;  
But she must lay her conscious head  
A husband's trusting heart beside.  
But fever'd in her sleep she seems,  
And red her cheek with troubled dreams;

The lip that there would cling for ever,  
While gleams on Parisina's face  
The heaven she fears will not forgive her,  
As if each calmly-conscious star  
Beheld her frailty from afar—  
The frequent sigh, the long embrace,  
Yet binds them to their trysting-place:  
But it must come, and they must part  
In fearful heaviness of heart,  
With all the deep and shuddering chill

帯び、

胸の思の苦しみにや、

晝の間はおくびにだにも出さざりし人の名をさ、  
やきつ、

己が胸にと、夢中にて夫を抱きよせたり。

されど其胸は夫に非ず、他の人の爲めに動悸せる  
なり。

此くて夫は抱きよせられて目さめつ、

誤つて自ら心に意ふらく、妻の夢中の此の息よ、

此の温なる抱きよ、

And mutters she in her unrest  
A name she dare not breathe by day,  
And clasps her lord unto the breast  
Which pants for one away :  
And he to that embrace awakes  
And, happy in the thought, mistakes  
That dreaming sigh, and warm caress,

(10)

此くの如き、己れは實に幸福なるものなりと。

かくて睡眠中に於てすら己を愛する妻を

彼は難有として妻の顔を眺めて嬉し滯きに滯きし  
ならん。

## 六

夫は眼れる妻を己が胸に引きよせて

其片々の寢言を聞きぬ。

彼れは聞きぬ—『如何なればアゾ(エステ)公は  
大天使の聲を聞きたる如く驚ろき玉ふにや？』

For such as he was wont to bless ;  
And could in very fondness weep  
O'er her who loves him even in sleep

## VI.

He clasp'd her sleeping to his heart,  
And listen'd to each broken word :  
He hears—why doth Prince Azo start,  
As if the archangel's voice he heard ?

(11)

公は再び眼をとなく目さめて

天の審判の坐の正面に立ち玉ふ時

是に優らん宣告の響は公の墓上に響くとなけん。

又た地上に於ける公の平和は

此ひゞきに由つて息むやう定められてあるべし』

―と。

此くて寢言に於てさゝやしき人の名は

パッシナの罪と、アゾ公の恥辱とを示めすなり。

其名は果して誰の名ぞ？

彼れの枕の上に、宛も逆か巻く怒濤が濱邊の板子

を巻き去りて

角ある岩に衝き當りて微塵に之れを打ち碎き、

あはれなるもの沈みて再び浮み得ざるごとき人の

名―

其名は彼れの精神には此くも激動を興へたり。

其名は果して誰の名ぞ。そはヒューゴーなりし―

彼れの愛したりし所の―

彼れは實に此れなるべしとは思はざりき。

あゝ其名は彼の愛する一子のヒューゴーなりき。

ヒューゴーは彼れ自身の衆惡の凝まりし子、

Sounds fearful as the breaking billow,  
Which rolls the plank upon the shore,  
And dashes on the pointed rock  
The wretch who sinks to rise no more,—  
So came upon his soul the shock.  
And whose that name? 'Tis Hugo's—his—  
In sooth he had not deem'd of this!—  
'Tis Hugo's—he, the child of one  
He loved—his own all-evil son—

And well he may—a deeper doom  
Could scarcely thunder o'er his tomb,  
When he shall wake to sleep no more,  
And stand the eternal throne before.  
And well he may—his earthly peace  
Upon that sound is doom'd to cease.  
That sleeping whisper of a name  
Bespeaks her guilt and Azo's shame.  
And whose that name? That o'er his pillow

彼れ放蕩の青年たりし時、  
ビアンカと云へる少女をそのかし、  
之れを己が妻となすことをせずして  
少女の頼みとせる信用を破りし時に生れし子なり。

七

彼れ劍を握れり。  
殆ど抜きて又た之れを鞘に納めぬ。  
彼女今やたとひ活くる價なきものなりと雖、  
此くも美しきものを彼は殺すに忍びざりき。

The offspring of his wayward youth,  
When he betray'd Bianca's truth,  
The maid whose folly could confide  
In him who made her not his bride.

VII.

He pluck'd his poniard in its sheath,  
But sheath'd it ere the point was bare—  
Howe'er unworthy now to breathe,  
He could not slay a thing so fair—

よしやはゑむことはなさすとも尙ほ心地よげに  
眠れるものを。  
殺さゝるのみに非ず、彼れは妻を起こしも爲さず。  
若しパリシナが夢より醒むるあらんには、  
能く其感覺を氷らしめ、再びこれを眠らしむるが  
如き容貌を以て  
彼は妻を見つめたり。  
而して其額には露の如き大なる玉なす汗は  
濕ひてかゝやく燈火に照らさる。  
パリシナ今は何事をも云はずなりて尙ほ眠れり。

At least, not smiling—sleeping—there.  
Nay more:—he did not wake her then,  
But gazed upon her with a glance  
Which, had she roused her from her trance,  
Had frozen her sense to sleep again—  
And o'er his brow the burning lamp  
Gleam'd on the dew-drops big and damp.  
She spake no more—but still she slumber'd—



されども夫の心の内には、バリシナの生命の日数は數へられたり。

## 八

朝に至り彼は四周の人々より

種々の談話を聞き集めて探索し、

彼等二人の現在の罪行及び己れ自身の將來の不幸等

彼れ聞くも好ましからざる凡て十分の證據を得たり。

While, in his thought, her days are number'd.

## VIII.

And with the morn he sought, and found,  
In many a tale from those around,  
The proof of all he fear'd to know,  
Their present guilt, his future woe;

(16)

久しき間二人の仲を知りつ、看過し居たる侍女等も

己の罪を免れんと、罪も、恥も、運命も、

盡く之れをバリシナ一身に押し寄せたり。

彼等の云ふ所は、是非とも信せざる可からざる所

に立ち入りて、凡ての事情を語りしかば、

今や秘密にされ居ること一もあるなし。

而してアゾの苦しき心と耳とは

今や何事をも感ずる能はず又た聞く能はざるなり。

The long-conniving damsels seek  
To save themselves, and would transfer  
The guilt—the shame—the doom—to her:  
Concealment is no more—they speak  
All circumstance which may compel  
Full credence to the tale they tell:  
And Azo's tortured heart and ear  
Have nothing more to feel or hear.

(17)

九

彼は躊躇する人に非ず。

彼の宮廷の一室には、

昔よりエステ家の宗領の座する審判の玉坐あり。

彼れこゝに坐し、彼れの貴族及び親兵は周圍に護

衛し、

彼れの正面には有罪の一對は立てり。

兩人共に年若し、又た其の一人の美しさよ！

あゝ劍なき帶をしめ、手は鐵鎖にしばられて、

IX.

He was not one who brook'd delay :

Within the chamber of his state,

The chief of Este's ancient sway

Upon his throne of judgment sate,

His nobles and his guards are there,—

Before him is the sinful pair ;

Both young,—and one how passing fair ;

With swordies belt, and fetter'd hand,

(18)

此くて子は父の面前に出でざる可からざるなり。

此くてヒューゴは父に面して立ち、

父の宣告を聞き、

又た其の不面目の話しを聞かざるを得ざるなり。

而してたとひ彼れ其聲に於ては黙せりと雖、

彼れの心や尙ほ未だ決して屈せざるなり。

十

物靜かに、色青さめて、又た黙して、

パリシナ死罪の宣告を待てり。

Oh, Christ ! That thus a son should stand

Before a father's face !

Yet thus must Hugo meet his sire,

And hear the sentence of his ire,

The tale of his disgrace !

And yet he seems not overcome,

Although, as yet, his voice be dumb.

X.

And still, and pale, and silently

Did Parisina wait her doom ;

(19)

あ、其變化如何にぞや。

昨日までは其の喜ばしき、物言ふ所の目は、

かゝやく室内に喜びを四周にそゝぎ、

高貴の人も彼女に接するを榮譽となし、

『美』は彼女のやさしき聲及び其可愛らしき容貌を

摸せんとし、

又た此女王の態度風姿より、

其『優美』を獲んとしたり。

若し彼女の眼に悲しみの涙あらんには、

數千の兵士奮て直ちに起ち

二

How changed, since last her speaking eye  
Graced gladness round the glittering room  
Where high-born men were proud to wait—  
Where Beauty watch'd to imitate  
Her gentle voice—her lovely mien--  
And gather from her air and gait  
The graces of its queen:  
Then,—had her eye in sorrow wept,  
A thousand warriors forth had leapt,

(20)

數千の劍は直ちに鞘を脱して閃き、

彼女の憂を以て己等の憂としたり。

然るに今や彼女は如何ん—又た彼等や如何ん。

彼女果して命令するを得るか。彼等果して従ふか

?

彼等今や默然として意を留めず、

俯して眉をひそめ

腕を拱きて其態度や冷然たり、

而して其唇は彼女に對する輕侮の情を禁じ得ざる

もの、如し。

A thousand swords had sheathless shone,  
And made her quarrel all their own.  
Now,—what is she? And what are they?  
Can she command, or these obey?  
All silent and unheeding now,  
With downcast eyes and knitting brow,  
And folded arms, and freezing air,  
And lips that scarce their scorn forbear,

(21)

彼等の勳爵士も宮女等も、又た其の宮廷も依然と

して存せり。

而して撰ばれたる一人、彼れ、

彼れの槍は尙ほ彼女の目前に立て掛けられて存す。

若し彼れの腕にして一瞬たりとも自由にあらんに

は

必ずや彼女に自由を得しむるか、或は死せしなる

べし。

彼れの父の新婦の嬖人たる彼れ、

亦た彼女の側に縛られて在り。

Her knights, and dames, her court—is there :  
And he, the chosen one, whose lance  
Had yet been couch'd before her glance,  
Who—were his arm a moment free—  
Had died or gain'd her liberty !  
The minion of his father's bride,—  
He, too, is fetter'd by her side ;

(22)

彼女が己れ自らの爲めよりも、彼れの爲めに失望

して

泣きはらして、涙を湛ゆる彼女の目を、彼は見る

ことを爲さざりき。

あ、其眼<sup>まぶた</sup>瞼には、すみれの色はたゞよひて

やさしき色をのこし、

嘗て柔かなるキツスを招きたる

滑かなる白きを通してかゝやさしが

今や熱して色青黒く

下なる眼を蔭すと云はんよりも、寧ろ之れを壓迫

Nor sees her swoln and full eye swim,  
Less for her own despair than him :  
Those lids—o'er which the violet vein  
Wandering, leaves a tender stain,  
Shining through the smoothest white  
That e'er did softest kiss invite—  
Now seem'd with hot and livid glw  
To press, not shade, the orbs below ;

(23)

するが如くにして  
涙に涙いやまさり  
いとゞ其みめ重たげなり。

十一

彼れ亦彼女の爲めに泣きぬ。  
されど其は、彼を見つむる彼女の爲めなり。  
彼れたとひ悲哀を感じたりとするも、其悲哀はね  
むりたり。  
彼れ嚴として其額をあげたり。

Which glance so heavily, and fill,  
As tear on tear grows gathering still

XI.

And he for her had also wept,  
But for the eyes that on him gazed:  
His sorrow, if he felt it, slept;  
Stern and erect his brow was raised

(24)

心は如何に悲哀を自白せりと雖、  
彼れ決して群衆の前に憶することを爲さざるなり。  
されども彼れ尙ほパリシナの方を見ることを爲さ  
ず、  
これ其罪及び其愛の彼の時、  
其現在の状況、其父の忿怒、凡ての善人の惡み、  
其地上の、又た永遠の運命の記憶たればなり。  
パリシナの容貌今や死せるもの、如し。  
彼女の容貌、あゝ彼女の容貌には彼れ一瞥だに投  
ずることを敢てせず

What'er the grief his soul avow'd,  
He would not shrink before the crowd;  
But yet he dared not look on her:  
Remembrance of the hours that were—  
His guilt—his love—his present state—  
His father's wrath—all good men's hate—  
His earthly, his eternal fate—  
And hers,—oh, hers!—he dared not throw  
One look upon that death-like brow.

(25)

たゞ其昂揚せる心情は、  
自ら故に此破滅を致さしめたる痛恨を洩らせるあ  
るのみ。

十二

アゾ公語るらくー

『昨日までも我は真に我妻及び我子に敬意を表し  
たり。

然るに今朝に至りて此夢は消散せり。

今日の日の傾くまでには、我は何ものをも有せざ

Else had his rising heart betray'd  
Remorse for all the wreck it made

XII.

And Azo spake :—"But yesterday  
I gloried in a wife and son ;  
That dream this morning pass'd away ;  
Ere day declines, I shall have none.

(26)

るべし。

我が後年はたゞ獨りさびしく過ごさる可らざる  
なり。

然り、其は其如くあらしめよ、

吾が爲せし如く爲さる者は活く可からず。

人倫の結繩は全く茲に破れたりー吾が破りしに非  
ず。

此事亦成る如くならしめよ、死は準備せられてあ  
るなり。

ヒューゴー、僧は汝を待てり、

My life must linger on alone ;  
Well,—let that pass,—there breathes not one  
Who would not do as I have done :  
Those ties are broken—not by me ;  
Let that too pass ;—the doom's prepared !  
Hugo, the priest awaits on thee,

(27)

又た汝の罪の報も待てり。  
往け、夕の星のかゝやく前、  
汝の祈禱を天にさゝげよ、  
若し或は汝の罪の赦さるゝこともやあるを伺へ。  
天の恵、或は尙ほ汝を赦すことあらんとも  
天が下、此地上に在つては  
汝と我とは一時なりとも俱に天を戴く一點の場所  
だにあらざるぞ。  
さらばよ。我は汝の死するを見ざるべし。  
されどもか弱き者なる汝は、彼れの首を見るべし。

And then—thy crime's reward!  
Away! Address thy prayers to Heaven,  
Before its evening stars are met—  
Learn if thou there canst be forgiven;  
Its mercy may absolve thee yet.  
But here, upon the earth beneath,  
There is no spot where thou and I  
Together, for an hour, could breathe:  
Farewell! I will not see thee die—  
But thou, frail thing! Shalt view his head—

(28)

去れ、我れ此他を語り能はざるなり。  
去れ、淫奔放恣の女、  
彼れの血を濺ぐものは我に非ずして汝なるぞ。  
去れ、汝若し彼れの最後の光景を目撃して、  
よく甘んじて我が與ふる生命を楽しみて生き残る  
ことを得ば生きよ。』

十三

厳格なるアゾは其面を蔽へり、  
これ其前額には血脈高く漲り、

Away! I cannot speak the rest:  
Go! Woman of the wanton breast  
Not I, but thou his blood dost shed:  
Go! If that sight thou canst outlive,  
And joy thee in the life I give."

XIII.

And here stern Azo hid his face—  
For on his brow the swelling vein

(29)

熱血腦に出入して

潮うしほの満干みらひの如くなりしを以てなり。

故に彼れ暫く其面おもてをうつぶさ、

震ふ所の手を目に當て、之を蔽ひ

以て人々に見られざらんとせり。

然るにヒューゴー其鎖くさり付けられたる手を揚げて

暫く父の猶豫を願へり。

黙せる父は敢て其子の願を禁じも爲さざりき。

ヒューゴー父に向つて云ふて曰く

『我は死を恐るゝ者に非ず、

我れ父上かたはらの側に在つて

激戦の間を乗り廻したるは父上の知る所なり。

父上の奴隸が我が手より取り去りし

一度だにも無益ならざりし我が劍が

父上の爲めに流したる血潮は、

今ま我が頭を斷る所の斧に従來血ぬりしよりも多  
かりき。

我生命は父上の玉ひし所、父上又た之れを取り去  
ることを得べし、

されど此賜物は我が難有ありがたしとせざる所、

For thou hast seen me by thy side  
All redly through the battle ride,  
And that not once a useless brand  
Thy slaves have wrested from my hand.  
Hath shed more blood in cause of thine  
Than e'er can stain the axe of mine:  
Thou gavest, and mayst resume my breath,  
A gift for which I thank thee not;

(31)

Throbb'd as if back upon his brain  
The hot blood ebb'd and flow'd again;  
And therefore bow'd he for a space,  
And pass'd his shaking hand along  
His eye, to veil it from the throng;  
While Hugo raised his chained hands,  
And for a brief delay demands  
His father's ear: The silent sire  
Forbids not what his words require.  
"It is not that I dread the death—"

(30)



又た我母の誤りも我れ忘れざるなり。  
我母の輕侮されたる愛情と、其壞られたる名譽と  
は

彼女の子が受け繼ぐ所の耻辱の遺産たるなり。

されども我母既に墓中に在ます、

母の子にして、父上の女敵たる我も、亦直ちに其  
所に至らん。

我母の破れたる心と、我切斷されたる頭とは

父上の若かりし時の愛—父としての慈愛は

實に誠に、又た實にやさしかりしことは、

墓より之れを父上に證明せん。

我れ父上に對して罪を犯したるは事實なり。

されども、惡に報ゆるに惡を以てす、何かあらん。

父上の妻と思ひ玉ふ所の、又た父上の虚しき誇り  
の犠牲たる女は、

久しく我ものと定まり居りしは父上の知る所、

然るに父上彼女を見て其嬌美を横領せり。

實に我れは父上の罪に由つて生れたり、

父上は我を生みて價なきものとして蔑如せり。

我は彼女の腕に擁せらるゝには不名譽のものとな

Thy youthful love—paternal care !  
'Tis true that I have done thee wrong—  
But wrong for wrong—this, deem'd thy bride,  
The other victim of thy pride,  
Thou know'st for me was destined long.  
Thou saw'st, and coveted'st her charms—  
And with thy very crime—my birth,  
Thou taunted'st me—as little worth ;  
A match ignoble for her arms,

Nor are my mother's wrongs forgot,  
Her slighted love and ruin'd name,  
Her offspring's heritage of shame ;  
But she is in the grave, where he,  
Her son, thy rival, soon shall be.  
Her broken heart—my sever'd head—  
Shall witness for thee from the dead  
How trusty and how tender were

れり。

何となれば我れ決して父上の名の正統なる相續人  
となり、

又たエステの王坐を占むることを要求し能はざれ  
ばなり。

されど若し我に二三の春秋あらんには

我名は全く我れ自身の名譽を以て

エステの名よりも輝くべし。

我は劍を有し又た大胆なる胸を有す。

以て能く我功名をして

Because, forsooth, I could not claim

The lawful heirship of thy name,

Nor sit on Este's lineal throne :

Yet, were a few short summers mine,

My name should more than Este's shine

With honours all my own.

I had a sword—and have a breast

(34)

父上の祖先等の列を抜いて冠絶せしむることを得  
ん。

我は善き門地の人の如く

常に勳爵士然として輝く拍車を着けずと雖、

「エステ及び勝利」の呐喊を以て

進撃するに當つてや

我が騎る馬の横腹は、槍の石づきを以つて刺撃し  
て

驕れる王侯貴人の列の前を騎りまわせり。

我れは自ら罪の辨護を爲さず、

That should have won as haught a crest  
As ever waved along the line  
Of all these sovereign sires of thine.  
Not alwys knightly spurs are worn  
The brightest by the better-born ;  
And mine have lanced my courser's flank  
Before proud chiefs of princely rank,  
When charging to the cheering cry  
Of ' Este and of victory !'  
I will not plead the cause of crime,

(35)

又た數時或は數日間我刑罰の免されんを願ふこと  
をも爲さざるなり。

何となれば終の時は

やがて直ちに我が如き盲行者の上に回轉し來るべ  
ければなり。

我が過去の如き狂妄なる瞬間は

決して永續すべきものに非ず、又た永續を爲さざ  
りき。

たとひ我が生れと我名とは卑しくとも、

又た父上は高貴のやからなるより

Nor sue thee to redeem from time  
A few brief hours or days, that must  
At length roll o'er my reckless dust ;—  
Such maddening moments as my past,  
They could not, and they did not, last.  
Albeit my birth and name be base,  
And thy nobility of race

(36)

我如きものを飾り立つる事を卑しむとも、  
尙ほ人々は我血統に於て

父上の容貌のおもさしありとなし、

我精神中には盡く父上の性質を受け傳へりとなせ  
り。

父上より我が此の大怛なる心情は得たり、

父上より—何故に父上は驚き玉ふ—

父上より凡てのもの皆剛壯にして我に來れり。

父上より我腕の強力、我炎の精神は得たり。

父上はたゞに我に生命を與へたるのみに非ず、

Disdain'd to deck a thing like me—  
Yet in my lineaments they trace  
Some features of my father's face,  
And in my spirit—all of thee.  
From thee—this tamelessness of heart—  
From thee—nay, wherefore dost thou start?—  
From thee, in all their vigour, came  
My arm of strength, my soul of flame—  
Thou didst not give me life alone,

(37)

亦た我を父上以上のものとなせり。

見よ、父上の罪ある戀愛は果して何を爲せしかを

！

あゝ父上には餘りによくも似たる子を以て報はれ  
たり。

我精神は決して私生兒には非ず、

何となれば我精神も亦父上の如く、同じく制御を

嫌へばなり。

我呼吸は父上よりの輕早なる賜ものにして、

父上又た速かに之れを取り返へし玉ふなり。

But all that made me more thine own,  
See what thy guilty love hath done !  
Repaid thee with too like a son !  
I am no bastard in my soul,  
For that, like thine, abhor'd control.  
And for my breath, that hasty boon  
Thou gavest and wilt resume so soon,

(38)

父上が價つもり玉ふ以上、我れ我生命を重く視ざ

るなり、

父上兜を戴き玉ふ時は、

吾等も共に轡を並べて戰場に馳驅し、

駿馬に鞭つて死者の上を乗り廻はしぬ。

過去は過去のみ既に何物にも非ざるなり。

將來も亦終には過去たらんのみ。

我れ寧ろ以前に死したりしことを願ふ。

何となれば父上たとひ我母に悪を行ひ玉ひしとも、

又た我物と定まり居りしものを父上の妻となし玉

I valued it no more than thou,  
When rose thy casque above thy brow,  
And we, all side by side, have striven,  
And o'er the dead our coursers driven :  
The past is nothing—and at last  
The future can but be the past ;  
Yet would I that I then had died :  
For though thou work'dst my mother's ill,  
And made thy own my destined bride,

(39)

ひしとも、

我尙ほ父上を我父なりと感せばなり。

父上の嚴酷なる命令は濫り<sup>か</sup>噎れたる音響の如く、

又た假令父上より出だされたるものなりとも、敢

て不正には非ざるなり。

罪に生れ耻に死し、

我生命は始と終を同うす。

父の誤りし如く子も亦同じく誤りぬ。

而して父上は二人の罪を一人に於て罰せざる可か

らざるなり。

I feel thou art my father still  
And, harsh as sounds thy hard decree  
'Tis not unjust, although from thee.  
Begot in sin, to die in shame,  
My life begun and ends the same ;  
As err'd the sire, so err'd the son,  
And thou must punish both in one.

(40)

今ま我罪を人間の眼より視る時は、最大不義の如

しと雖、

神は我等兩人の罪、孰れか大なるを審判すべし。』

#### 十四

彼れ語り終りて手を組み合はして立ち、

縛せる鉄鎖は響きたり。

其鈍重なる鉄鎖の相觸れて響くや、

並み居る凡ての將士の耳には

傷つけられしが如く感せざるは一人としてあらず

My crime seems worst to human view,  
But God must judge between us two!"

#### XIV.

He ceased—and stood with folded arms,  
On which the circling fetters sounded ;  
And not an ear but felt as wounded,  
Of all the chiefs that there were rank'd,  
When those dull chains in meeting clank'd.

(41)

りき。

而してパリシナの不運なる美しさは  
再び人々の注目を引き付けたり。

此くてパリシナはヒューゴの死刑の宣告を聴か  
ん。

彼女色青ざめて静かに立てり、  
之れ實にヒューゴの罪の活ける原因なり。  
パリシナの眼は少しも動かす十分廣く見張り、  
一度も、何れをも顧みしことなく、  
又た一と度も其美しき眼瞼を閉せしこともなく、

Till Parisina's fatal charms  
Again attracted every eye—  
Would she thus hear him doom'd to die!  
She stood, I said, all pale and still,  
The living cause of Hugo's ill:  
Her eyes unmoved, but full and wide,  
Not once had turn'd to either side—  
Nor once did those sweet eyelids close,

(42)

又は其視線を覆ひかくすこともなかりき。

其眼の、濃き青色の周圍をは

取りまける白色は廣まりて

宛も硝子の如き見へを爲し、

パリシナの凝まりたる血の中には、或は嚴氷ある

かと疑はれぬ。

されど大なる玉なす涙は集まりて

美しき眼瞼の、長き黒き房なすまのげより

時々頬を傳ひて流れ落ちぬ。

之れ聴くべきものに非ず、見るべきものなりき。

Or shade the glance o'er which they rose,  
But round their orbs of deepest blue  
The circling white dilated grew—  
And there with glassy gaze she stood,  
As ice were in her curdled blood;  
But every now and then a tear,  
So large and slowly gather'd, slid  
From the long dark fringe of that fair lid  
It was a thing to see, not hear!

(43)

人若し之れを見しならんには

此くの如き大なる玉なす涙は人間の眼より出で得るやに驚くなるべし。

パリシナ語り出さんと思ひたり、

不完全なる音節は、せき上げ來る咽喉のんごの中にひゞきたり。

されども其の空しき低き呻吟の中に

彼女の全心情は調子を以て湧き出づるもの、如くなりき。

呻吟止みぬ—彼女の女再び語り出でんと思ひたるが

And those who saw, it did surprice  
Such drops could fall from human eyes.  
To speak she thought—the imperfect note  
Was choked within her swelling throat,  
Yet seem'd in that low hollow groan  
Her whole heart gushing in the tone.  
It ceased—again she thought to speak,  
(44)

今や彼の女の聲は長さ一聲の叫びに破裂し、

パリシナ撞然として地上に倒れ、

或は石或は立像が其臺石より覆へされたる如くにして、

パリシナは生命ある有罪のものたり、

其各感情は刺撃して罪を行はしめ

而して其罪行の證明と其絶望とに堪え得ざるもの  
の如くならず、

寧ろ始より生命を有せざるもの、如く、

又たアゾの妻の紀念立像の覆へりたる如くなりき。

Then burst her voice in one long shriek,  
And to the earth she fell like stone  
Or statue from its base o'erthrown.  
More like a thing that ne'er had life,—  
A monument of Azo's wife,—  
Than her, that living guilty thing,  
Whose every passion was a sting,  
Which urged to guilt, but could not bear  
That guilt's detection and despair:

宛も闇夜に當つて暴風震怒せるの時、  
荒れ野に電光一閃し、  
辛くもさびしき一條の小路を瞥見したるが如きな  
り。  
彼女は恐れぬ—何物か悪しき事  
其心中に、深く且つものすこく存することを感ぜ  
り。  
彼女、罪と耻との其身にあり  
又た何人か死せざる可からざるを知る。されども  
誰ろや？

With glimpses of a dreary track,  
Like lightning on the desert path,  
When midnight storms are mustering wrath.  
She fear'd—she felt that something ill  
Lay on her soul, so deep and chill—  
That there was sin and shame she know,  
That some one was to die—but who?

然りと雖彼女は尙ほ活けり、  
而して万事其死の状態より回復せり。  
然りと雖一切の感覺は切烈なる苦痛の爲めに過度  
に緊張せられ、  
心緒こゝに錯亂して道理の力は全く去れり。  
彼女のかよわき脳髓の織緯は  
(宛も弓の弦が雨めに濡はひゆるみて、  
其的をあやまる如く)  
其思想を滅裂混亂せしめて發表せり。  
彼女の過去は空にして其將來は暗黒なり。

But yet she lived—and all too soon  
Recover'd from that death-like swoon—  
But scarce to reason—every sense  
Had been o'erstrung by pangs intense;  
And each frail fibre of her brain  
(As bowstrings, when relax'd by rain,  
The erring arrow launch aside)  
Sent forth her thoughts all wild and wide—  
The past a blank, the future black,



彼女之れを忘れぬ—彼女呼吸せしか。

此くの如き—尙ほ下には地あり、

上には天あり、四周に人ありと云ふを得るか、

又た今までは同情を以て

彼女の眼に向て微笑し人々の眼は

今は怒れる悪魔には非ざるか。

彼女の乱調にして漂搖せる心には

一切混乱不明たるなり。

其心情は荒妄なる希望と恐怖との混沌にして

忽ちにして笑ひ、忽ちにして泣き、

其兩極端に於て全く狂せる如く

痙攣的の夢を以て煩悶せり。

これ其夢は彼女の上に破裂する如く見へたればな  
り。

あゝ彼女は尙ほ無益に其夢より醒むることに煩悶  
せざるを得ざるなり。

## 十五

寺院の鐘は

もの悲しげに徐々と鳴れり。

But madly still in each extreme,  
She strove with that convulsive dream;  
For so it seem'd on her to break:  
Oh! Vainly must she strive to wake!

### XV.

The convent bells are ringing,  
But mournfully and slow;

(4)

She had forgotten:—did she breathe?  
Could this be still the earth beneath,  
The sky above, and men around;  
Or were they fiends who now so frown'd  
On one, before whose eyes each eye  
Till then had smiled in sympathy?  
All was confused and undefined  
To her all-jarr'd and wandering mind;  
A chaos of wild hopes and fears:  
And now in laughter, now in tears.

(48)

灰白色の四角なる塔樓に

深き響きを以て鐘は彼方此方に振り動けり。

其響は人の心にいとも重く感ぜらる。

聖歌の聲は聴こゆなり。

これ樓の下なる死者の爲めに

或はやがて直に死する者の爲めに歌ふものにして

死に行く人の靈魂の爲めにとて、

死の詠歌はうたはれ、空しき鐘はひびくなり。

彼れは臨終に近づき、

僧の膝下に膝づけり。

In the grey square turret swinging,  
With a deep sound, to and fro:  
Heavily to the heart they go!  
Dark! The hymn is singing—  
The song for the dead below,  
Or the living who shortly shall be so!  
For a departing being's soul  
The death-hymn peals and the hollow bells knoll,  
He is near his mortal goal;  
Kneeling at the friar's knee,

(50)

彼れの聲や悲しく、其姿やいぢらし。

彼れ冷たき地上に膝まづけり。

前には斷頭臺あり四週には番兵あり。

後ろには斷頭者ありて腕をまくりて立てり、

これ其白刃の一撃をしてよく迅速且つ正確ならし

めんが爲めなり。

而して斷頭の斧は其刃を新にせしものなるを以て

彼れ其刃に指を觸れて其銳利なるやを驗せり。

而して人々寂として聲なく、

父の宣告せる死罪に由つて死する所の子を見んと

Sad to hear—and piteous to see—  
Kneeling on the bare cold ground,  
With the block before and the guards around—  
And the headsman with his bare arm ready,  
That the blow may be both swift and steady,  
Feels if the axe be sharp and true—  
Since he set its edge anew:  
While the crowd in a speechless circle gather  
To see the son fall by the doom of the father!

(51)

して集まれり。

十六

時はこれ尙ほ—此悲しき日に登りて、  
其確乎たる光を以つて此光景を嘲りし所の  
夏の太陽の西山に没する前の  
いと美はしき時なり。  
ヒューゴ、僧に對して最後の懺悔を爲し、  
其悔悟の神聖を以て  
自己の運命を悲しむの時

XVI.

It is a lovely hour as yet  
Before the summer sun shall set,  
Which rose upon that heavy day,  
And mock'd it with his steadiest ray;  
And his evening beams are shed  
Full on Hugo's fated head,  
As his last confession pouring

(52)

夕陽の光は

ヒューゴの命數定る頭に注がれぬ。  
彼れ、僧より、一切我等の罪を拭ひ去ると云ふな  
る

免るしの惠ある言葉を聽かんとして  
其身を前にかゝめたり。  
彼れ膝づきて僧の言葉を聽くの時、  
天上高き太陽は彼れの頭に照り輝きぬ。  
彼れの黄金色の環をなす髪は  
其わらはなる頸うなじに半ば房の如くかゝれり。

To the monk, his doom deploring  
In penitential holiness,  
He bends to hear his accents bless  
With absolution such as may  
Wipe our mortal stains away.  
That high sun on his head did glisten  
As he there did bow and listen—  
And the rings of chestnut hair  
Curl'd half down his neck so bare;

(53)

されども一層輝く光線は

彼の近くに光る所の断頭の斧より反射して、

閃としてもものすごい光を放てり。

あゝ此の死別の時のすごいかな。

かの剛毅嚴格の人なりとも、皆恐れを以て身体氷

りたる者の如くに立てり。

あゝ其罪や暗く、其法律や嚴正なり。

人々此光景を見し時は皆其身をふるはせたり。

## 十七

But brighter still the beam was thrown  
Upon the axe which near him shone  
With a clear and ghastly glitter—  
Oh! That parting hour was bitter!  
Even the stern stood chill'd with awe:  
Dark the crime, and just the law—  
Yet they shudder'd as they saw.

(54)

此不義の子にして大怛なる情人の

別れの祈禱はさゝげられたり。

彼れの冥福及び懺悔は、再びこゝにくりかへして

禱られたり。

彼れの時は最後の瞬間に來れり、

彼れの上衣は先づはぎ去られたり。

彼れのかゞやける黄金の髪は、今や剪られざる可

からざるなり。

此事は爲されたり—髪は剪られたり。

此時まで着たりし下衣、

## XVII.

The parting prayers are said and over  
Of that false son—and daring lover:  
His beads and sins are all recounted,  
His hours to their last minute mounted—  
His mantling cloak before was stripp'd,  
His bright brown locks must now be clipp'd;  
'Tis done—all closely are they shorn—  
The vest which till this moment worn—

(55)

パリシナの與へたる肩衣、

是等は墓にまで彼れを飾ること能はず、

今は盡く取り去られざる可からざるなり。

今や彼れの眼は白布を以て蔽はれんとせり。

然りと雖此くの如き最終の凌辱は

決して彼れの倨驕なる眼には近づき得べきものに  
非ず。

彼れ決して、自己の死を見ることを敢てせぬ如き

盲目を甘受する者に非ず。

故に斷頭者が彼れの目を蔽はんとして準備するや、

The scarf which Parisina gave—  
Must not adorn him to the grave.  
Even that must now be thrown aside,  
And o'er his eyes the kerchief tied ;  
But no—that last indignity  
Shall ne'er approach his haughty eye.  
All feelings, seemingly subdued,  
In deep disdain, were half renew'd  
When headsmen's hands prepared to bind

(56)

彼の凡ての感情は今まで鎮壓されし如くなりしも  
忽ち深き侮蔑の情を以つて半ば醒起し、  
毅然として之れを拒反して曰く

『否、我血も亦我呼吸も凡て、汝に没收されてある  
なり、

我手は鐵鎖を以て縛されあるなり、

せめては我眼をして蔽はるゝことなく死せしめよ。

「撃て」。言ひ終りて

斷頭臺上に其頭を俯せり。

之れヒューゴの最終の言葉なりき。

Those eyes which would not brook such blind,  
As if they dared not look on death !  
“ No—yours my forfeit blood and breath—  
These hands are chaind—but let me die  
At least with an unshackled eye—  
Strike ! ”—And as the word he said,  
Upon the block he low'd his head ;  
These the last accents Hugs spoke :

(57)

『撃て』—斧は閃めき一撃下るや

頭は前に轉落して流血淋漓、

血に塗れたる持上がる其軀軀は後ろに倒れたり。

各々の血管よりは血の雨として

盡く地に墮ちぬ。

彼れの眼と唇とは暫く顫動し、痙攣し居たるが、

終に永久に静まりぬ。

彼れ、不義の人々の死するが如く死せり。

葬禮の裝飾も隊列もなし。

彼れ柔和に膝づきて祈りたり、

“Strike!”—and flashing fell the stroke—  
Roll'd the head—and, gushing, sunk  
Back the stain'd and heaving trunk  
In the dust, which each deep vein  
Slaked with its ensanguin'd rain;  
His eyes and lips a moment quiver,  
Convulsed and quick—then fix for ever.  
He died, as erring man should die,  
Without display, without parade;  
Meekly had he bow'd and pray'd

(58)

決して僧の助けを輕侮することなく

又た神の信仰に於て絶望することもあらざりき。

彼れ高僧の前に膝ける間

全く浮世の感念を絶ち、

怒れる父、及び愛婦の事は全く念頭に存せざりし

が如し。

此瞬間に於て、是等のもの何ぞ念ず可けんや、

今や誹謗もなく絶望もなく、

たゞ天を思ふの外、何の思ひもなく、たゞ祈禱す

るの外何の言葉もあらざりき。

As not disdainng priestly aid,  
Nor desperate of all hope on high.  
And while before the prior kneeling  
His heart was wean'd from earthly feeling;  
His wrathful sire—his paramour—  
What were they in such an hour?  
No more reproach—no more despair;  
No thought but heaven—no word but prayer—

(59)

たゞ斷頭者の斧を受みんが爲め衣を剝がれし時、  
目を蔽ふことなく死なんことを願ひたる  
僅かの言葉ありしのみなり。  
之れ彼れの唯一の訣別の語なりけり。

## 十八

死して閉ぢたる唇の如く靜かに、  
觀る者皆な其呼吸を收めたり。  
されども死の一撃彼れの頸に下り、  
生命も戀愛も此く終りし時、

Save the few which from him broke,  
When, bared to meet the headsman's stroke,  
He claim'd to die with eyes unbound,  
His sole adieu to those around.

### XVIII.

Still as the lips that closed in death,  
Each gazers bosom held his breath:  
But yet, afar, from man to man,  
A cold electric shiver ran,

(60)

人々の間には遙かに  
寒冷なる電流通じ  
寂として聲なく、  
皆そのと息を胸におさめぬ。  
斷頭者斧を撃ち下して力餘り  
斷頭臺に斬り込みて激動したる音の外、  
他に音響なるものあらざりき—たゞ一聲の叫びを  
除くの外。  
あゝ此の靜寂なる空氣を劈きて  
狂氣の如き烈しきは何の聲ぞも。

As down the deadly blow descended  
On him whose life and love thus ended;  
And, with a hushing sound compress'd,  
A sigh shrunk back on every breast;  
But no more thrilling noise rose there,  
Beyond the blow that to the block  
Pierced through with forced and sullen shock,  
Save one:—what cleaves the silent air  
So madly shrill, so passing wild?

(51)

宛も母の、其子が不意の打撃に逢ひて

死するを歎くもの、如く、

宛も靈魂の永久の苦痛を訴ふるもの、如く、

其聲空にひゞきたり。

其恐ろしきすぎき聲は

アゾの宮殿の窓を通して天に昇れり。

人々の目は其方に向けられぬ。

されども其響きも其光景も、同じく息みたり。

其聲は女の叫びにして

此くまで狂氣の如き絶望の聲は他にあらざるべし。

That, as a mother's o'er her child,  
Done to death by sudden blow,  
To the sky these accents go,  
Like a soul's in endless woe.  
Through Azo's palace-lattice driven,  
That horrid voice ascends to heaven,  
And every eye is turn'd thereon ;  
But sound and sight alike are gone !  
It was a woman's shriek—and ne'er  
In madlier accents rose despair ;

此聲を聞きし人々は、此聲の息みし時、  
皆、此叫びは最終のものたりしことを願ひたり。

### 十九

ヒューゴーは死せり。

此時より宮殿にも廣間にも、又々園亭にも

パリシナの聲も聽かれず、姿も見えざるなり。

パリシナの名は宛も放逸不徳或は恐ろしき言語な

るかの如く

人々の口にも耳にも全く消え失せて、

And those who heard it, as it pass'd,  
In mercy wish'd it were the last.

### XIX.

Hugo is fallen ; and, from that hour,  
No more in palace, hall, or bower,  
Was Parisina heard or seen :  
Her name—as if she ne'er had been—  
Was banish'd from each lip and ear,



パリシナなる者は、初めより有らざりしもの、如し。

而してアゾ公の口よりは

其妻及び子の事を言へるを、一人として聴きしと云へるものもなし。

彼等二人は墓も有せず又た紀念もあることなし。

彼等の身は聖められざる塵土なり。

其日死したる勳爵士の身に付ては、明かに然りしなり。

されどもパリシナの運命は、棺の下なる塵の如く

Like words of wantonness or fear ;  
And from Prince Azo's voice, by none  
Was mention heard of wife or son.  
No tomb--no memory had they,  
Theirs was unconsecrated clay ;  
At least the knight's who died that day.  
But Parisina's fate lies hid

(64)

全く隠秘にして知るべからず。

或は寺院に在つて其生を保ち

苦悶と斷食と、窮りなき涙との

枯落したる痛恨の數年を重ね、

獨りさびしき道を天にたどりたるか。

彼女の、敢て自ら暗黒なる戀愛を感せしより觀る

時は、

或は毒を仰ぎしか、又は自刃を爲したるか。

或は斷頭者の與へたる激動は

と急激に切痛に、

Like dust beneath the coffin-lid :  
Whether in convent she abode,  
And won to heaven her dreary road,  
By blighted and remorseful years  
Of scourge, and fast, and sleepless tears ;  
Or if, she fell by bowl or steel,  
For that dark love she dared to feel ;  
Or if, upon the moment smote  
She died by tortures less remote,

(65)

哀れ、パリシナの身に來り、  
斷頭臺上に見し彼れの如く、  
遠からざる苦惱にて、

其瞬間の感動の打撃にて死せしかは、  
一人として知る者なく、一人として知りし者なし。  
よしパリシナの終は如何ならんとも、  
彼女の生涯は、悲歎に始まり悲歎に終りしなり。

二十

其後アゾは新に妻とりて

Like him she saw upon the block,  
With heart that shared the headsman's shock,  
In quicken'd brokenness that came,  
In pity o'er her shatter'd frame,  
None knew—and none can ever know:  
But whatsoever its end below  
Her life began and closed in woe.

XX.

And Azo found another bride

(66)

善き兒等は其側に成長せり。  
されども墓に凋みし彼れの如く  
美にして剛胆なるは一人もあらざりき。  
たとひ之れ有りとするも  
其成長は、アゾの目にはとまらざるか、  
或は閉塞すると息を以て見られしなり。  
而して涙も其頬を傳ふことなく、  
微笑も其額に浮ぶことなし。  
其廣き美しき額には  
憂の思ひは線を織りて交叉し

And goodly sons grew by his side;  
But none so lovely and so brave  
As him who wither'd in the grave;  
Or if they were—on his cold eye.  
Their growth but glanced unheeded by,  
Or noticed with a smother'd sigh.  
But never tear his cheek descended,  
And never smile his brow unbended;  
And o'er that fair broad brow were wrought  
The intersected lines of thought;

(67)

燃ゆるが如き悲哀は  
時々其皺に表はるゝなり。  
而して引き劈く所の心の瘡痕は  
精神の戦争が後に残せしものたるなり。  
彼れには、凡ての快樂も悲哀も已に過ぎ去り、  
何物も此世に於て残れるものなし。  
だゝ眠られざる夜と、重き晝とのあるのみにして  
心は毀譽褒貶に向て死し、  
情は自ら之を避くると雖、  
尙ほ服従するを好まず、又た忘れ能はず、

Those furrows which the burning share  
Of sorrow ploughs untimely there ;  
Scars of the lacerating mind  
Which the soul's war doth leave behind.  
He was past all mirth or woe :  
Nothing more remain'd below  
But sleepless nights and heavy days,  
A mind all dead to scorn or praise,  
A heart which shunn'd itself—and yet  
That would not yield—nor could forget.

(68)

其聊かなりとも融解せんとするや、  
深かく考へ強く感せり。  
されど最も深く常に凝れる氷も  
たゞ其表面を閉ざし得るのみにして  
活ける流れは下に在つて元氣あり、  
溢れ溢れて息むことなし。  
たとひ其心胸は閉されたりとも  
天の與へし思想は尙ほ胸中に來往せり。  
吾等ひせぬ涙は暫く之れを拂ふを得るとも  
其根蒂や甚だ深くして、全く之れを消滅せしむる

Which, when it least appear'd to melt,  
Intensely thought—intensely felt :  
The deepest ice which ever froze  
Can only o'er the surface close—  
The living stream lies quick below,  
And flows—and cannot cease to flow.  
Still was his seal'd-up bosom haunted  
By thoughts which Nature hath implanted ;  
Too deeply rooted thence to vanish,  
Howe'er our stifled tears we banish ;

(69)

こと能はざるなり。

涙一旦溢れて流れ出づるや。

吾等心情の此水をせき止むることを得るとも、  
之れ干涸したるに非ず。

せきし涙は今や其源泉に流れ復へり、

其源に於て一層純潔に静止し

永久こしなへに其深き所にありて、

見へもせず、泣きもせず、されど又た氷結して冷  
却することもなく

顯はれざる所に在つて自ら其情をいつくしみはこ

When, struggling as they rise to start  
We check those waters of the heart,  
They are not dried—those tears unshed  
But flow back to the fountain-head,  
And resting in their spring more pure,  
For ever in its depths endure,  
Unseen, unwept, but uncongeal'd,  
And cherish'd most where least reveal'd.

(70)

くむなり。

死せし彼等を歎かんと

後に残りし感情は内に起り、

荒れはてたる空隙は彼をして苦痛を感せしむると

雖、

再び充たすの力なく、

再び彼等と會合して

其一致したる靈魂は喜悅を受くるの望もなく、

たゞ彼れ正義の命令を發したると

彼等二人は惡の報を得たりとの此自覺を有すと雖、

With inward starts of feeling left,  
To throb o'er those of life bereft;  
Without the power to fill again  
The desert gap which made his pain;  
Without the hope to meet them where  
United souls shall gladness share,  
With all the consciousness that he  
Had only pass'd a just decree;

(71)

なほアゾの晩年はあはれむべきものなり。  
 かの樹木の悪しき枝は、  
 注意して切り去る時は、  
 之れが爲め樹木に勢を興へ、  
 其他の枝葉も亦生々として花さき、  
 縁に榮えて新鮮に又た自由に成長すと雖、  
 若し雷霆其の怒りに乗じて  
 烈しく其のそよぐ枝を害する時は、  
 苦むす大なる幹も爲めに損害を被り  
 再び青葉の出づることあらざるなり(終)

That they had wrought their doom of ill;  
 Yet Azo's age was wretched still.  
 The tainted branches of the tree,  
 If lopp'd with care, a strength may give,  
 By which the rest shall bloom and live  
 All greenly fresh and wildly free:  
 But if the lightning, in its wrath,  
 The waving boughs with fury scathe,  
 The massy trunk the ruin feels,  
 And never more a leaf reveals.

(Finis)

(72)

明治三十六年三月十五日印刷發行  
 明治三十八年五月二十日訂正三版印刷  
 明治三十八年五月廿五日訂正三版發行

編者 木村鷹太郎

東京市神田區錦町一丁目十番地

副島優

東京市淺草區黒舟町二十八番地

榎本邦信

東京市淺草區黒舟町二十八番地

東京並木活版所

發行元 東京市神田區錦町一丁目 尚友館書店

電話本局 二二八二

著作権  
 所有

著 君 郎 太 鷹 村 木

沫 餘 潮 鳴

冊 壹 全 美 頗 釘 裝  
錢 八 金 稅 郵 錢 十 六 金 價 正  
行 發 版 六 第

書物は大世界を縮寫せるものにして讀書は一種の逍遙遊なり天あり地あり山あり海あり花あり鳥あり偉男子あり美人あり哲理あり和歌あり政論あり詩文あり莊大なるあり優麗なるあり悲哀なるあり快樂なるあり此くて本書は著者の讀書上の百感を記するものなり近來流行の所謂美文或は漫筆等の無意味なるものと趣を異にす『アナクレオンの快樂歌』『バイロンの女性及び愛戀觀』及び全詩人の『海賊及びサタン主義』等の痛快奇警なる大論文も本書中に收めあり

*7/12*

11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100